
モンスターハンター　＝狩人の道程＝

怠惰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～狩人の道程～

【Zコード】

Z3536D

【作者名】

怠惰

【あらすじ】

一年以上に渡る村での仕事を終え、一人のハンターは新たな狩場を求め街へと移る。向かう先で新米ハンターを待つのは険しき大自然か、凶暴なモンスターか、それとも…【前作『狩人の心得』の続編となります。『未経験の方でも楽しめる二次創作』というスタイルは崩しておりませんので、初見の方は宜しければ前作よりお読み下さい】

竜。それは生態系における頂点に君臨する最強の種族にして、世界の覇者。

木々を薙ぎ払う鋭い爪牙に、堅牢な鱗に覆われた強靭かつしなやかな体躯。対の翼により陸のみでなく空をも制し、吐き出す火球は岩をも熔かす。

見上げるほどどのその巨体に相応しい膂力を持ち、更にその生命力は致命傷以外の一切の傷を癒すという。

それに比べ、ヒトという種のなんと脆弱な事が。

進化の途中で外敵と戦うための爪牙は失われ、寒暖に対応するための体毛も退化した。空も水の中も自由には動けず、唯一生息を許された地上でも、その能力は大半の生物の更に下位に位置付けられる。

柔らかな皮膚は小枝に引っ掛かるだけで裂ける。全力を出しても素手では小石一つ割ることも出来ない。

されど、それらの脆弱さの代わりにヒトは道具を創り出す知恵と、それを扱う技能を手に入れた。

爪が無いなら武器を、体毛が薄いなら服を、自然治癒力が低いなら薬を、体力が乏しいなら乗り物を。

そうして不足したものを創り出していった結果、ヒトは生態系の頂点に極めて近い所まで上り詰めた……そういうても過言ではあります。

しかし、それだけではいけない。それらは飽くまで模倣と代用で

あり、絶対の優位を確立するための力とは成り得ない。

では、ヒトが生態系の頂点たる存在
は何が必要なのか。
竜に対抗し、上回る為に

その答えは、至極簡単。

ヒトの持つ他を圧倒する固有の能力、それはすなわち

1 Prologue 02 (後書き)

前作はテーマを「動機」と設定して執筆しましたが、今回のテーマはこれです。分かりますでしょうか？
ピンと来た方も分からぬ方も、これから話の中で出来る限り表現していくつもりです。推理しながら読んでいく……なんてのもありでしょうか。

それと、前回最後に「ある程度書き溜めてから投稿します」と書いたような記憶がありますが……

完璧に見切り発車です。サーベン~~~~~

……というわけで、物凄く不定期な更新になる」と間違いなしです。
長く温かい田で見守つていてくださいませ。

2 空の下、広場にて

「一年半もの間、本当に有り難う。おかげで私の夢もついに実現された！」

季節は温暖期。直前の繁殖期によつて増加したモンスター達が気温の上昇と共に精力的な活動を始め、それの影響により各地で様々な被害が発生、ハンターズギルドへの依頼が殺到することから、俗に「ハンターの季節」とも言われる時期である。

砂漠でのダイミョウザザミとの対決の際に負つた傷も癒えなみに、その骸のサイズを計測したところ、もう少しでキングサイズに達するかというほどの大物であつたらしい。これから忙しくなるかと思った矢先に掛けられた村長のそんな言葉に、俺は一瞬ぽかんと口を開けて頭上に疑問符を浮かべた。

「最初は本当にどうなることかと思つたが、君たちをはじめ多くの人々の支援によつてとうとうこの口を迎えることができた。本当にいぐり感謝の気持ちを述べても足りないくらいだ」

俺の手をぐつと握り締めながら、村長は感極まつたようにそんな言葉を口にする。「えーと、どうこういひことだ？　俺、これから狩りに行きたいんだけど。

「明日には宴会を開くことになつていてる。君にも是非出席して欲しいのだがどうかね？　急な仕事などがあるなら仕方ないが

「あ、いや、大丈夫だ。つか、今の所は明日どころかこの先ずっと予定は白紙だけども」

「そうか、それは良かった！ それでは楽しみにしていてくれ。たいしたものは用意出来ないが、この村の船出として最高のものとなるように様々な趣向を凝らすつもりだからなー」

「はつはつはつ！ と笑いを残し、村長は背を向けて去つて行つた。

「……な、なんなんだ？」

訳が分からず、周囲を見回してみると、一見すると村の様子は今までと何も変わらないように思えるのだが……よく見れば、どこか違和感のようなものを感じた。

鎧を振り下ろしては村中に高らかな音を響かせる鍛冶職人、昼から酒場で杯を交わす大工たち、道端で商人と值引きの交渉をする婦人、明るい笑い声を上げて走り回る子供たち……と、そこで気付いた。

田の出でているものは防柵や家屋などの建築に駆り出され、いくらやれども増えていく大量の仕事に振り回されていた土木関係の職人たちが暇そうにしている姿がちらほらと見られるのである。

酒場で管を巻く大工たちの姿を七本足の珍獣でも見つけたかのように氣持ちで眺めていると、新調したばかりの鎧の上から背中をばしりと強めに叩かれた。

「お一つすアンク。鎧なんて着込んで、これから狩りにでも行くの？」

「あ、リエス……いや、そのつもりだったんだけども……」

「ん？ どうかしたの？」

その衝撃に振り返ると、この村に雇われているもう一人のハンター、リエスが今さつき振り下ろしたのである。右手を挙げてそこに立っていた。

季節に合わせた淡い琥珀色をした半袖の服から伸びたしなやかな腕はほのかに白く、目を凝らせばいくつもの細かい傷が刻まれているのが見える。俺よりも多く残されたその痕は、ハンターとしての経験の差といつものを実に雄弁に物語っている。

「何つーかさ、俺が医者に拉致られてた間になんかあつたのか？」

「拉致られてるって、ありやアンクが悪いんじょうが」

俺が診断翌日に釣りをして傷を悪化させ、その翌日に酒盛りをして暴れてまた悪化させ、更に翌日に博打でイカサマのいぢやもんを吹っ掛けられた事にキレて暴れておまけに傷を悪化させた事に俺を診た医者が激怒し、完治までの間診療所からの外出を禁止したのだった。

部屋に持ち込まれる荷物は全てチェックされ、便所に行くのにも監視が付くという徹底ぶりにここは監獄かと呟いた回数は数知れず。

「でもよ、いくらなんでも窓枠に鉄格子は無いだろ。鳥籠じゃあるまいし」

「そこまで警戒されてたの？ 全く、普段馬鹿やつてるから悪いのよ」

「いやまあ、それはともかくだな。村長がなんか言ってたんだが、明日何があるんだ？ 出所したばかりで婆婆の話題についていけないんだが」

「刑期を終えた服役囚みたいな事を……。というか、知らされてなかつたの？」

「おう、外界から隔離された上に一日中薬の調合ばっかやらされたからな。アオキノ「の臭いで嗅覚が狂うかと思つたぞ」

「……突つ込むのも面倒になつてきたわね」

リエスは呆れたようにため息を吐き、頭を押さえる。

「まあいいわ。とにかく、明日は村を挙げての大宴会になるのよ」

「宴会？ 何かめでたい事でもあつたのか？」

「ええ、それはそれはめでたい事がね。村長がようやく名実共に村長になるわけだから。つまり」

「 ああ、村が完成したのか！」

「そゆ」と

なるほど、村長のテンションが高かったのはいつこいつ理由からか。
……つて待てよ。

「つーことは、もしかして……」

「ま、そういうことね」

リエスはにつこいつと嬉しそうに、綺麗に整つた顔を笑みにする。

「一年半に渡つたこの仕事も遂に完遂！　お疲れ様、アンク！」

村の大広場の真ん中では余った建材などを集めて作られた組木に火が放たれ、天を焦がさんばかりに立ち上る炎が煌々と温暖期の夜闇を照らす。

その前に作られた即席の舞台の上では旅芸人による演奏と舞踊が行われ、更にその周りを酒が入つて上機嫌になつた村人たちがふらふらとした足取りで思い思いのステップを踏んでいる。

俺はといえばそこから少し離れた場所でそれを眺めつつ杯を口元へ運んでいる。気分が乗らないとか空気が読めないなどというわけではない。現在、思う存分暴れ回つた後の小休止といった所である。

「アンク、もう少し抑えなさいよ。見てるこっちが恥ずかしいわ」

隣には杯と肉の盛られた皿を持つたりエス。俺が暴れ回つている間、こいつは村人たちの卓を回つて何やら話をしていた。

「踊る阿呆を見る阿呆、だろ。いいじゃねえか、お前に迷惑がかかることもないし」

「アンクがどう考へてるか知らないけど、村の人たちは一人一組に見てるのよ。わざわざから何て言われてたと思つてるの？」

「おたくの旦那様はハンサムで凛々しくて素敵な方ね、羨ましいわあとか？」

「残念ながら、おたくのペットは下品で粗雑で品性のかげらも無い野蛮な動物ね、同情するわあとか」

おい。

「しかし、この村ともお別れか……一年半、色々あつたよなあ

「そうねえ。アンクが武器を落としてブルファンゴと殴り合つたり、アンクが川でこけて兜を無くしたり、アンクが自分で仕掛けたシビレ罠に引っ掛けたり」

「リエスがセクハラ発言をした工場の親方を殴り倒したり、リエスが尻を触つたいたずら小僧を蹴り倒したり、リエスが酔っ払つて酒場の飲み代を踏み倒して逃げたり」

「あはははは、そこにリエスにランスチャージで突き倒されたりつて項目を追加してあげよつか？」

「はつはつは、それじゃ俺は胸を揉まれて可愛い悲鳴を上げた思い出を足してやるわ」

「…………」

「…………」

軽やかな笑い声の後、しばし沈黙する一人。そして

「やれるもんならやつてみなアーー。」

「上等だアーー！ 後悔してからじや遅えぞ！」のアマーー。」

がつおつと手四つに組み、世界一不毛な戦いが始まった。

「…………」のめでたい田山、呆れたよつてんざひづきなながら村長がやつてきた。

ぎつぎつと腕の筋肉を軋ませる俺達の元へ、呆れたよつてんざひづきなながら村長がやつてきた。

「あ、どうも村長。」の度はおめでとうござります」

「おめです。今日は楽しませて貰つてます」

「ありがとう。所で、少し話があるのだが……遊んでないで真面目に聞いてもらえるかな？」

「取り敢えず、まずは仕事の報酬を。本当に助かった、ありがとう」

「いえいえ、こちらも楽しみながらやりさせて貰いましたから。これからの更なる発展を祈っています」

「じゅらんと重い音を立て、村長の懐から取り出された一つの布袋が卓の上に置かれる。

「それでだね。この周辺に棲息するモンスターについての話を聞いておきたいのだが、いいかね？ 特に肉食竜の巣や餌場になつているような場所があれば是非教えてもらいたい」

「ええ、構いません。地図はありますか？」

取り出された村周辺の地図を広げ、3人で話し合ひながら所々丸を付けたり色々注釈を書き付けていく。

「この地図は普段から必要とされるものではないし、一々地図を見直さずとも体で覚えている俺やリエスのためのものでもない。これは主に、次この村を訪れるハンターの為のものだ。

とはいえるも恒久不变の情報ではない。時が経てば巣穴の場所などはいくらでも変わるだろう。だが、それでもこれらの情報は探索の指針程度の役には立つだろう。

「……ま、こんな感じか？」

筆を置いて地図全体を眺める。一面にびっしりと書き込まれた様々な情報、これが俺とリエスが一年半の時を掛けて収集した全てである。

「今は大分減つてますけど、2、3年に一度はハンターに依頼をして頭数の調整をしたほうがいいですね。しばらくは草食獣の数が突出して増えるでしょうけど、年を経るにつれて肉食獣も少しづつ増えてくるでしょうから」

「うむ、分かった。……ところで、これからどうするのかは決めた

かね？「

「これから、か。そうだな……リエスは何かあるか？」

話を振ると、リエスはそれについては既に考えていたようで、間を置かずに答えを口にする。

「取り敢えず北に向かおうかと。この時期、街に行けば仕事には困らないでしよう」

「ふむ、ここから北の街となるとエルサルンかね？　あそこは良い街だ。一年中活気に溢れているし、住む人々も親切でとても明るい」

「エルサルンか……10日もあれば着くか？」

「馬車を使えばね」

「まつり、と。何か不吉な事をリエスは口にした。

「……まさか、歩くのか？」

「この村に何台馬車があると思ってるの？　最後にそんなことで迷惑かけるわけにもいかないでしょ」

「いや、街を往復する商人とかに便乗させてもいいぞ……」

「それなら昨日村から出でていったけど？」

「……マジ？」

駆け出し故予備の装備などの豪張るものはそれほど多くないが、それでも一年半という期間の内に集めた物はかなりの量になつている。

「因みにあたしは昨日のうちに荷物だけ運んで貰つたけど。あ、セゴいとか言うのは無しね。なんせこちらは色々と多いし、それにオノナノコだから」

「笑顔でじまかされると思つなよ……」

「ははは、そりゃ。隙あらばもう少し長居してもうって色々とやつて貰おうかと思つたのだが。次の目的地が決まつていいのなら無理に引き止める訳にもいかないか」

そう言つと、村長はポケットから色鮮やかな刺繡がされた小さな袋を取り出し、俺に手渡した。

「？　これは……」

「昔、竜人族の友人から貰つたお守りだ。竜骨で作られた彫像が中に入つてゐる。道中の危険から身を守ってくれるというが、私はこの外に出ることとはもう滅多にないだろうからね。君たちに預けるよ」

では、この近くに来る機会があつたらまた酒でも飲み交わそう。
そう言い残して村長は席を立つた。

「んじゃ、そろそろあたしも寝るじよつかな。明日は日が昇る前

に出たいから

「ん、……俺はもう少しゆっくつしてくわ」

「明日飲み過ぎで足腰立たないようだったら容赦無く置いてくわよ？」

「んな不様は晒さねえよ。女子供はさつぞと寝ろ」

しつしつと追い払うように手を振るうとリースは肩を竦めて歩きだし……一度、こちらを振り返った。

それに気付かない振りをして杯を煽ると、リースは何か言いたそうだったが、しばらくするとそのまま去っていった。

「…………」

燃え上がる炎を囲んで、音に合わせて楽しそうに踊る村人たち。思わず何か眩しいものを見るように目を細めて、じっとその光景を眺める。

人で出来た輪。見知った面々が思い思いに手拍子を打ち大声で天に叫び杯を打ち鳴らしている。これまで自分のいた場所、それがあもう、どこか遠い場所のように思える。

「……この村の行く末に」

小さく杯を掲げ、ぼそりと呟く。

返される声もないまま独り酒に口を付けた。それなりに強い酒のはずだったが、何だか水のように薄っぺらな味がした。

全く、別れつてもんは何度経験したといひで一向に慣れないな。

思わず天を仰げば、陰り一つない夜空に無数の星が散りばめられていた。それこそ、手を伸ばせば掴めそうなくらいに大きく輝きながら。

「エルサルン、か」

別れは悲しく辛い。だが、別れ無くては出会いの価値も霞み濁ってしまう。

だから今は、この感傷を否定する事なく素直に受け入れるとしよう。

新たな始まりの為に。

3 路の街

ハンターという職業柄、長距離の遠征にしろ短距離の強行軍にしろ徒步での移動には慣れたものではあつたが、それでも今回の旅は足が棒どころか更に中へ鉛を注ぎ込んで外面を岩で覆い駄目押しに巨大な足枷を嵌めたかのようになるほどの苦労に満ちていた。

村を出てから十数日の間の変わらぬ日常。日が昇る前に動き始め、夕方によく終わりかと思えば野営の準備。夜間も一人で代わる代わる荷物番に起きて気の休まる暇もない。おまけに温暖期の苛烈な太陽の下でとなれば、それは正に地獄の行進、デスマーチだ。訓練所でもこのようなカリキュラムはあつたが、所詮演習は実践に遠く及ばないということがよく理解できた。

そして現在、目の前にあるのはここ最近眺めていたどこまでも街道と平原の続く寂しい風景ではなく、人の手によって作り出された巨大な石壁。

南面にいくつか設けられた門の前には人がずらりと何列にもなつて並び、そこで荷物や人相を改められては内側へと飲み込まれていく。

その人々の多くは商人のようであり、馬の曳く荷台の上には毛皮や食料品など様々な品物が山と積まれていた。

「アンクは、こういう大きな街には来たこと無いの？」

それらを眺めていると、隣でリュックサックを一つ背負つたりエスがそう話しかけてきた。

「そうだな。住んでた村の外に出る機会は結構あつたけど、俺のいた地方はもつと田舎だったからな」

「せつか。街の中せむつと混雜してゐだるつかひ、あまつきゅうを
よひして迷子にならないようこね」

「ガキじやあるまこし、んなことござなりぬえよ

「田舎者はすぐこなづけ」

「せつとか」

「せわ捨てるよしだれりつと、コロスはにせでと楽しむりと笑つた。

「取りあえず、街に入つたら酒場に挨拶に行つて部屋を借りましょ。
四本ある橋の中の右から一一番田を渡つた先にあるから、もしはぐれ
てもちやんと来てよね」

「へいへい、分かったよ

足取りも重く、僅かに進んだ行列についていくためにゆっくらと
前進する。

『路の街』 ハルサルン。

三本の主要な街道と河川が交わり、重要な交通拠点として拓かれた街である。

街の人口の数倍に値する人々が日々訪れては物を売り、足を休め、

品を仕入れて後にする。毎日が慌ただしく、ここで一生を過ごしたいとはとても思えるような場所ではないが、溢れんばかりの旅人や商人達の持つ独特的の活気に満ちており、適当にぶらついているだけで少なくとも退屈に困ることはなさそうである。

街の中央を流れる川を北から南へ両断するように走る大通りの両端には様々な店が並び、また一本裏に入れば怪しげな出店がそこかしこに顔を覗かせている。

街の周りは高い壁で囲われてはいるが、それはモンスター対策というよりどちらかといえば人同士のいさかいに対する防壁に近い。備え付けられた兵器の類も、竜退治のものではなく一般的な大砲や投石器などが多く見られる。

「つ、すげえ人だな……」

「だから言つたでしょ。ほら、観光は後にしてまずは酒場を目指すわよ」

一步足を踏み入れれば、そこに拡がるのは圧倒的なまでの人の群。一見すればただ混雑しているだけにも思えるが、その動きの中にはある種の規律のようなものが見てとれた。

まず、誰もが足を止めない。そしてふらふらと歩き回るのではなく、どこか明確な目標を目指して動いているようだ。

「門の前だからね。まずすることといったら宿を探すか、或いは商店に品物を卸すかそのどちらかよ」

「そりいえば、人は多いけど店はあまり無いな」

「こんな所で店を開いたら通行の邪魔になるでしょ。少し歩けば嫌」というほど並んでるわよ」

リエスの背についていきながらもきょろきょろと街の様子を伺つてゐると、確かにその通りだつた。ほんの数分もしないうちに周りは様々な店で溢れ、人込みもざわざわと無秩序なものに変わつていつた。

リエスはその人の波をひよいひよいとかわしながら進んでいくが、よそ見をしながら歩いている俺はガンガンぶつかり押され突き飛ばされながらふらふらと蛇行している。

それを見兼ねたのか、リエスは雑踏の中でもよく通る声を上げ、俺の手を取つた。

「ほら、物珍しいのは分かるけどさつと行くよー。街を見たいなら後で一緒に歩いたげるから、集中して動くー！」

「はいはい……」

俺の右手を掴んでずんずん進んでいくリエスの背中を視界の端に収めつつ、それでも俺は周囲の様子を見るのを止めなかつた。

店頭の籠に山のように積まれた果実、きらびやかな反物を道を歩く人々に披露する呉服屋の商人、慌ただしく働くウェイターを従え濛々と湯気と白煙を吐き出す定食屋。

どれも珍しい店ではないが、その桁違いの規模に圧倒された。あれほど量を捌ける物なのか疑問に思えるほどである。

「……お子様同然じやないの」

ぼそりと何かを呟かれたような気がしたが、それも猥雑な空氣の中に溶けて消えた。

それなりに幅のある川に掛けた巨大な石橋の辺りまで来ると人込みも大分薄れ、行き交う人々の纏う空気も僅かに変わってきた。

叩いてみるまでもなくしつかりとした造りであろうことが伺える、細工の省略された素朴で重厚な橋を渡れば、その先には五階建ての巨大な酒場が居構えていた。

高さは言うまでもなく、驚くべきはその横幅か。駆け足でも端から端まで一十秒は優にかかるであろう、一般的な家屋なら四、五軒は並ぶほどの長さである。

まずリエスがその玄関口をくぐり、それに続いて俺も足を踏み入れる。中は思ったよりも質素で、外見の半分ほどの広さで一室が区切られていた。

店内には六人程が席に付けそうな円卓がそれなりに間隔を空けていくつも並び、数組のハンターと思われる集団が談笑に興じていた。奥には一枚板のカウンター席があり、その端の方には窓口が開かれている。その横には巨大な掲示板がでんと吊られており、その面にはいくつもの紙片が所狭しと添付されている。恐らくクエストの依頼や狩場周辺の情報などが書かれているのだろう。

その内容が気になつたものの、まずはいくつかの手続きを行つたために一人窓口へと向かつた。

「いらっしゃい。あなたたちは新顔かしら?」

窓口にはギルドメンバーであることを表す制服を纏うブロンドの女性が座っていた。眼鏡をかけており、その雰囲気は事務的という言葉とは遠く、柔らかな印象を受ける。

「ええ。今まで南で仕事をしてたんだけど、それが終わつたからまた新しく始めようかと思って。ま、暫くは休みたいけどね」

「せつ、じゃあ暫くはこの街に滞在するのね。宿はどうあるの?」

「空き部屋があれば貸してほしいかな。ランクはローンでいいから、一部屋ないかしら」

「大丈夫よ。この街のハンターは出入りが激しいから、定まった宿を決めずに倉庫だけ借りる人が多いのよ」

「成る程、そりや経済的だな」

「あたしたちはそんな頻繁に遠出するつもりもないし、部屋を借りた方がいいわよ」

「それだと街にいる間は宿をめぐることになるしな。それじゃ、とりあえず一人ともこれを見んで、そのあとここに名前を書いてもらえる?」

渡された書類 ギルドに所属するハンターとして何がどうこうといったことが書かれた、一種の契約書のよつなものだ に軽く印を通して署名欄にさつとサインを書き込み、窓口の女性に渡す。

「アンクに、リエス ね。私はエメ。これから宜しくね」

書類を受け取ると、ギルドメンバーの女性 エメは片手を差し出してきたので、俺はそれを取つて軽く握手を交わす。

「それじゃ部屋に案内するわね。上の階に行くほどランクは上がるから、他の人の部屋を訪ねる時には参考にしてね」

Hメはリエスとも握手を交わした後、壁に掛けていた鍵を一つ取ると階段へと歩き始めた。

「んで、これからどうすんだ？」

その後ろに着いて歩きながら　なんか今日は女性についていくばかりだな　隣のリエスに話し掛ける。

「そうだねえ、アンクは何かしたいことでもあるの？」

「ちょっと前までは久しぶりのベッドだし爆睡しようかと思つてたけど……折角だし街を散策でもしようかな、と」

「そだね。初日だし、色々見て回つてみるのもいいかも」

「リエスも一緒に来るか？」

「行くよー。なんかアンク一人で街に放り出したらそのまま帰つてこれなさうだし」

「ガキじゃあるまいし」

「それ、さつきも言ってなかつた？」

「そうか？」

ようやく田的場に着いて安堵した事の反動か、自然と口が動いてべらべらと言葉をたれ流す。

「あー、それとまともな飯が食いたいな。あと酒。ついでに博打」

「博打は止めときなセー、博打は」

「じゅあ薬」

「人間辞めたいの？」

そんな無駄口を叩きながら、僅かに軋みを上げる階段をゆっくりと上がつていった。

初日は賑やかな街の空氣に当てられて観光に勤しみ、一日田はどつと溢れた旅の疲れに一日部屋でぐうたらと過ごし、三日田はなんとなく怠惰な気分を引きずつたまま街をぶらついたりしてのほほんと。

そんな感じの数日であったが、俺もいつぱしのハンターであり調子も整つて街の空氣にも慣れてくるとどうにも体を動かしたくなつてくる。

というわけで現在、リエスを誘つて酒場のテーブルに着き、これから取る仕事について話し合いをしている訳である。

「新しい狩場での最初の仕事、つていえば基本はキノコ狩りよね」

「いや、そりゃそうだけども……せつかくの温暖期にもそもそ土弄りつてのもなあ」

ハンターの仕事に昼夜の違いはさほど関係ないが、それでも朝を過ぎて昼飯にはちょいと早いこの時間帯にはあまり人の姿も無い。それなりの数が揃えられた円卓も使われているのは一、二ばかりで、カウンターにも鎧を着込んだ同業が数人座つてゐるだけである。

「一応地図や棲息情報にも目を通したけど、実際目にしなきや分からぬこともあるでしょう。まずはそれを把握しないと」

「別にガノトトスを狩りつて訳でも無いんだし、ドスイーオスとかクックくらいなら大丈夫だろ。いい加減剣を振らないと腕が鈍つちまつ」

「クツクだつて立派なモンスターよ。嘗めてかかつたら痛い目見るわ」

「そんなん分かつてるつて」

セオリー通りキノコ狩りを薦めてくるリエスに対し、俺は小物でもいいから狩猟の仕事をしたいと言い張る。

モンスターが盛んに活動する温暖期に、二人陰気に地面を眺めてキノコの判別なんぞ御免なのである。

そんな調子で一向に前に進まない会話を繰り広げていると、階段を降りてくる二つの影に気が付いた。

「……なんだありや」

階段から現れたのは男女一人の組み合わせで、当然ながら鎧に身を包み背には狩猟用の大型武器を負っている。

男は鎧竜グラビモスの甲殻を使用した岩の塊のような装備に身を包み、腰には巨大なハンマー 銘は分からないが、かなり使い込まれているようである を括り付けている。

その独特の膨れ上がったようなシルエットもだが、何より眼を引くのはその容姿である。

兜を外したその頭部からは光溢れる金色の長髪が流れ、すらりとした目元には落ち着いた知性の輝きが宿る。頬から顎のラインはすっと筆で引いたかのように引き締まり、艶やかな口唇が優美なアクセントとなつて全体を一層際立たせている。

その美形のイメージをそのまま現実にしたような顔立ち。だが

男は、その左半分を何故か無骨な鉄仮面で隠していた。

仮面の目元には黒い硝子のようなものが嵌め込まれており、他人事ながらちゃんと視界が確保できているのか心配である。

その後ろを歩く女性は全身をランポスの鱗で作られた軽鎧に身を包み、やや小振りなボウガンを背負っている。

腰ほどまであるうかといふ長い茶髪をきつちつと一本に編み上げ、お下げの形に纏めている。ハンターは仕事の内容等の点から女性でも短髪が基本なので、これほどにまで伸ばしているのは珍しい事である。

その装備からも予想できるが、恐らくはまだ駆け出しなのである。男の元で修業中なのか、あるいは男が守つてやっているのかどちらにせよ、アンバランスな組み合わせである。

……まあ、それを言えば俺達もだが。

その二人組はそのまま窓口へと向かい、Hメと何やら話を始めた。これから仕事にでも向かうのだろう。

「あー、それじゃ妥協案として、ドスランポスの狩猟がサブターゲットにあるキノコ採集の仕事を探すってのは

「逆ならともかく、そんな仕事あるわけないでしょ。常識的に考えて」

「いや、最近キノコを食べるドスランポスが発生してキノコの採集中影響が出るとかそんな事情があれば」

「アイルーを主食にするHスの存在並にあり得ないと思つけどね」

「いや、でも長年見つからなかつたドスケルピが発見されたって話もあるし、もしかしたらあるかもよ」

「それキリンじゃないの?」

そんなこんなで内容が段々とオカルト方面に傾き始めた頃、

「話の最中済まないが」

突如、テーブルの横から話し掛けられた。

「少しいいか」

その声の主へと視線を向けると、そこには先程の仮面男とお下げ女がいた。

「構わないけど……何か用か?」

「仕事をしないか」

……前置きもなく出てきたその言葉の意味が一瞬理解できなかつたが、すぐにパーティーを組むことを提案しているのだと気が付いた。

「 内容は? あまり面倒なのは無理よ。私たち、一つちに来てからまだ日が浅いから」

俺が口を出す前にリエスが先手を打った。男はそれに表情一つ変えずに返答する。

「ゲリヨスの討伐。私の武器は不向きで、彼女はまだ大型モンスターに不慣れだ。その点、君達の武器なら相性は悪くない」

俺とリエスはふむ、と小さく頷いた。成る程、言っていることは

もつともである。

毒怪鳥ゲリヨス。醜い容貌に大きな鷦鷯冠を持ち、性格はなかなか狡猾。他のモンスターにない多くの特徴を供えており、打撃に耐性を持つゴム質の皮膚もその一つである。

しかし、ドスイーオス討伐にさえ難色を示したリエスがこの提案に乗るようにはどうしても思えない。俺としては新しいモンスターとの戦いということで心惹かれるものがあるのだが、今回は残念ながらお流れといった所だろう。

そう思ったのだが、リエスは腕を組んで何やら考え込み、そしてしばらくしてから

「……うん、あたしは構わないかな。アンクはどうが」

「あ、ああ。俺も別にいいぞ」

不可解に思いながらも、俺はリエスに倣つて小さく頷く。
「では、一緒に窓口まで来てくれ。仕事の契約をする

男の台詞に続き、その後ろに立っていた女性が

「よ、宜しくお願ひしますね」

と、ここにきて最初の言葉を口にした。

「宜しくね。あたしはリエス。いつまはアンク」

続いて自己紹介をしようとしたらあつせいとリエスに先回りされ

た。たいした」とではないが、その位自分でさせてくれ。

「あ、はい、私はシルファと言います。それで……」

「ブレイスだ。宜しく頼む」

二人組 シルファとブレイスも血口紹介を済ませ、改めて窓口へと向かう。

「この四人でいいのね？ そんなに大変じゃないとは思うけど、気を抜かないで頑張つてね。はいこれ、引換券」

ギルドの制服を纏つたエメは愛想の良い笑顔のまま木片を一つカウンターに置いた。これをかかる所に渡せば移動用の馬車と交換できる仕組みである。

その車屋への道中、隣を歩くリースに一つ尋ねてみた。

「リース、どうしてこの話を受けたんだ？」

がちやがちやと足音を鳴らし、リースはんー、と唸つてから答える。

「アンクに多人数での戦い方を知つて貰おうかなって」

「つまり、チームワークつてやつか？」

「そ。業界にはソロ専門のハンターつてのがざらにいるけど、それだつてまずは自分がどちらに向いてるのか知つておかなければだしね。」

個人での狩りは一年近くやつてきたわけだし、そろそろいつにも手を出しつくべきかなって

「因みにリエスの好みは？」

「ソロ」

「……俺は邪魔か？」

「ははっ、冗談だつて。あたしはもう狩りに対するポリシーとか無いしね。効率的だと思う手段を取るだけだよ」

けらけらといつもの笑いを浮かべるリエスを横目に、前を行く二人を眺める。ブレイスはともかく、シルファの後ろ姿からはどこか緊張と不安の色が見える。

それに気付いたのかどうか、ブレイスはシルファに向かつて何やら言葉を掛けた。雑踏に紛れてその内容は聞き取れなかつたが、それでシルファの気は晴れたようだつた。

隣をちらと見れば、こちらは打つて変わつて陽気に鼻歌なんぞを詠んじていた。……全く、かわいげの無い。

4 初動（後書き）

ブレイスの一言田が初校では「 や ら な い か 」 だつたのはここだけの秘密です。

最近になつてようやく武器を使い分ける事を覚えました。ガノスにヘビーボウガン、ディアブロにハンマーは私のジャステイス。

ただしガンランスだけは扱えない。……切れ味が、切れ味がつ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536d/>

モンスターハンター = 狩人の道程 =

2010年10月10日01時10分発行